

Title	能美郡民謡集(早川孝太郎編, 郷土研究社発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.145(305)- 146(306)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0146">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0146</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分かれて居る。次に第一篇に收める所のものを紹介する。

第一引田城山——大川郡に屬し、東讚唯一の要港たる引田港の東北にあつて、天成の要害をなし、頂上は南北東の三方に展開する。其城址は朝鮮式山城に屬するので、天智天皇の朝に唐新羅の來寇に對する國防として築かれた屋島城に策應すべき爲めに築城せられたものであらう。

第二城山城址——綾歌郡の北部に聳立する城山の上に存し、同じく朝鮮式山城にして、山頂の平坦部全部を以て城廓をなし、城門址、壘壁等現存し、又ホロソ石組石と呼ぶ築城關係のものも存して居る。本城は始め國造時代綾氏によつて築城せられたが、天智天皇の朝に唐新羅の侵襲に備へる爲め増せられたものであらふ。又管公の當國に國司であつた時この城山に雨を祈つたことは有名な話である。余昨秋南狩遺蹟調査の節この組石を見たが仲々大きなものであつた。

第三鹽飽島史蹟——仲多度津郡に屬し、備讚海峡の西部にある本島始め數島の合稱である。島は南北朝頃より内海に於ける倭寇の根據地となり、島民は操舟に熟練するので、秀吉の西國九州兩征伐には軍隊輸送の事に預り、其の爲め秀吉より天正十八年には全島物成一千二百五十石を船方六百五十人に與へられた。徳川幕府になつても同じく朱印を與へられ、殊に河村瑞賢の奥羽官米の廻遭の節には、其舟隻の完堅精好、島民の淳朴なる故に輸送に選ばれたのであつた。幕末には本島の泊浦笠島の兩所に幕府の貯炭所が設置せられ、又幕府軍艦の水夫には島民多く、殊に安政七年咸臨丸の米國渡航の乗組員中廿六人は當島の出身であつた。これ

等によつても島民の操舟の術に熟達して居つた事が推察せられる。全島には「人名」と稱する一階級のもの六百五十人があり、それより四人の年寄が選ばれて島治に當る。寛政年間には本島泊浦に勤番所を設置して全島の政所をなし、殊に同所に朱印書庫（方一間半）を建て、庫内に厨子があり、厨子の中に石櫃があり又石櫃の中に木箱があり、其の中に信長、秀吉、家康以下の朱印狀其他重要書類を入れてある箱が收めてあり、實に鄭重を極めたものである。これによつても當時、御朱印の如何に大切なるものであつたか窺はれる。

第四銅鐸——大正十二年四月十七日三豐郡一谷村夢畑より出土のものにつき詳述せられたものである。猶本縣には從來發見せられたものは既に十個に及ぶといふ。

次に第二篇天然記念物之部に於ては本縣の植物礦物廿一種につき其の種類、名稱、所有地、地目、所有者、形狀及現狀、沿革、保存管理等分つて詳記せられたものである。猶本書には鮮明な數十の寫眞、測定圖等を本文の適所に挿入してあつて甚だ便利である。

最後に本調査に主として努力せられた調査委員岡田唯吉、福家惣衛の兩氏に滿腔の敬意を表する。

（大正十三、十二、廿 武田勝藏）

### 能美郡民謡集

早川孝太郎編  
郷土研究社發行

本書は爐邊叢書の一冊として最近にあらはれたものであつて、

石川縣能美郡に行はれたる民謡を、編者が塵の都のこの東京において偶然かくばかり多數に採集し得たことは、驚異すべきことである。巻頭には柳田國男氏の序文があつて、民謡に關する多くの興味ある問題と示唆を與へらるゝのであるが、更に本集の民謡そのものに接して、種々の感興の湧き出づるのをおぼえる。蓋し吾々は民謡によつてかゝる民謡を生みだした村の生活にふれることが出来るからである。僅か一行の歌にも戀の涙のかゞやきを見、一片の童兒の歌にも自然に對する人間の純情を感じる。殊に本集における『兄妹しんじゆ』のごときは戀愛の一大悲劇であつて、新しい戯曲にしくんでもおもしろからうと思はれるが、更に評者にまつて興味のあるのは、この物語における假裝の問題である。臺灣の生蠻には、母もしくは妹が假裝によつてその子もしくは兄を欺いて相婚する傳説が多數に存在する。而してこの場合は近親相婚の成立であり、『兄妹しんじゆ』はその否定であるけれども、假裝によつて對者を欺くといふことは兩者共通であり、これと關聯して、三輪山の傳説やキュービド神話におけるがごとき、姿をかくして女のもとに通ふといふ戀愛物語も想起される。さうして『兄妹しんじゆ』が女萬歳から傳へられたと註に言へるごとき、かかるグドキ類の民間叙事詩は、或時代に或處で實際に起つた事件が無名詩人の手によつて詩につくられた後日旅から旅へ傳へられたものであらう。本集の『おさち清三』のごときは、評者の故郷においても盆踊音頭としてうたはれるものである。編者はなるべく他地方との類似歌をばぶくにつぎめられたと言はるゝものの、しかもなほ二三類似歌の發見せらるゝのは、特定の作

者の判明せざる、この意味において普遍性のつよい民謡の性質としてやむを得ないであらう。むしろ吾々はこれによつてその歌の分布範圍や地方地方の古い交通關係を知り、類似歌の比較研究からその原型をもぎ得ることあらうし、またその土着化程度によつてその地方の特色をうかがうこともできる。要するに本集に収録された長短二百數十首の歌はいづれも北陸の數村の人々によつてうたはれた地方色の豊かなもので、世の民謡愛好家並びにそれによつて村の生活を知らうと欲する人々には是非一讀をすゝめたい。

(松本芳夫)

### 郷土會記錄(柳田國男編)

大岡山書店發行

本書は新渡戸博士や本書の編者を中心として明治四十三年より大正八年まで存続した郷土會のその時々記録を集めたものであつて、それぞれの記録は話者が親しく觀察したる村の話、或はそれに關係ある事項の研究である。海幸の村、山幸の村、幽靜な溫泉村、信仰のために起つた村、或は都市の周圍にあつて絶えず急激な變化をうけつゝある郊村、或は水害になやまざるゝ村、或は罹災民の開いた新部落、或は遠くはなれた島の話、或は村開墾の話、民間信仰の話、或は滅びた江戸の舊事談、或は黒川能や刀鍛冶の話など、いづれもさりげなくつきざる興味をそゝり、有益な知識を與へるのである。これら二十編の話はすべて各方面の學者の精確なる觀察談であるから、それぞれの村の組織、行政、産業、或は風俗習慣等の生きた資料であつて、村の經營者によつて他山